

『在津紀事』に見る尾藤二洲

— 在坂前期における古林立菴・赤松眉公・隱岐菜軒・古賀精里との交友

諸田龍美

一、はじめに

在坂前期（明和・安永年間）における尾藤二洲（一七四九—一八一三）の生活と交友について知ろうとする場合、頼春水が記した、青春時代のメモワール『在津紀事』は、不可欠の資料である。前稿^{〔1〕}においては、『在津紀事』を主軸としながら、頼春水・片山北海・中井履軒との交友について考察したが、本稿においては、同じ手法によって、古林立菴・赤松眉公・隱岐菜軒・古賀精里との交友について考察する。

それに先立ち、次節では、前稿において掲載の余裕がなかった頼春水関連の記事を紹介しておきたい。^{〔2〕}

二、頼春水と『中庸首章図解』

①（一六七）吾が塾生一夜外より帰り報ず、上町火を失すと。時に志尹上町に居る。余二三の塾生を拉し、走つてこれを救ふ。至れば則ちその火甚だ遠し。志尹孤坐し、燈下に在つて書を攤く。乃ち先に塾生を遣り還し、与に

中庸首章の章図を論じ、夜半茶を喫して帰る。

上町……江戸時代には大川より安堂寺橋筋の間で東横堀川の東の地域。城代・町奉行をはじめ与力・同心の役所・屋敷があった。³⁾

至れば……稿本は「踰²東渠」の三字を「至」に改める。

中庸首章の章図……与楽園叢書・一に「中庸首章図解」を収載。安永八年（一七七九）春に二、三の同志と作るという。また同叢書・一に中庸知仁勇図解・中庸章図・中庸二十七章大小相資首尾相応図を収める。

【通釈】わたしの塾生が、ある夜、外から帰ると「上町で火事が起きました」と報告した。当時、志尹（尾藤二洲）は上町に住んで居たので、わたしは二、三名の塾生を引き連れて、走って救いに向かった。到着してみると、その火事は随分遠いことがわかった。志尹は、独りで燈下に坐り、書物を開いていた。そこで、先に塾生を帰らせて、二人で『中庸』首章の章図について論じ、夜中に、茶を飲んで帰ったのであった。

【考察】二洲が『中庸首章図解』を撰したのは、安永八年（一七七九）の春、三十三歳の時であった。『中庸首章図解』は、その六年後、天明五年（一七八五）仲冬に重修訂正され、享和元年（一八〇一）に江戸で出版された。

二洲が大坂上街（上町）で開塾したのは、安永元年（一七七二）、二十六歳の折であったから、この上町火災の記事は、最大限に見積もれば、安永元年（開塾）から天明五年（重修訂正）の間の出来事ということになるが、白木豊氏は「此の頃（『中庸首章図解』を撰した安永八年春）の事であろうか」と推定されている。⁴⁾ 私見によれば、この記

事は、おそらく安永六年（一七七七）十二月に発生した「天満の大火」の折の出来事と推定されるが、その理由については後述する。

さて、天明五年に、当該書を重修訂正した折の跋文には「己亥（安永八年）の春、二三の同志と（『中庸』の）性・道・教の義を論ず。因って図解一巻を著す」とある。この「二三の同志」の一人が頼春水であったことは、上記の『在津紀事』からも明らかであろう。もう一人は、赤松子方であったかと推定されるが、その理由についても後述したい。

何れにせよ、この逸話には、足の悪い二洲が火災から逃げ遅れているのではないかとおそれて、塾生と疾駆する春水（三十三、四歳）の篤い友情と、その後の、泰然自若たる二字者の風姿とが、鮮やかな対照によって浮き彫りにされており、印象深いエピソードである。

ところで、『中庸首章図解』の内容については、二洲自身が、その初稿の最後部（『静寄軒集』卷之八所収）において、次のように要約している。

中庸の本旨は、唯だ斯の道の天に出づるを明らかにするに在り。故に層なま層なまねて図をつく為れり。固より支離に近きなり。但だ余の意、初学をして此れに因って以て略性はらと気との分、道と教の別を知らしめんと欲するなり。若し夫れ明らかなる者は、豈に此れを待たんや。

この記述について、白木氏は次のごとく述べておられる〔前掲注（4）書・二六一頁〕。

これは『中庸首章図解』に載せてある最後の文である。支離に近いとか、「中庸」の真意に明らかなる者は、此の図解に待つ必要はないとか言っているのは謙辞である。講義する学者たちが「後生の為めに中庸を講ずるに、此れに就きて指示すれば甚だ入り易し」と伝写して珍重していたものなのである。

しかし結局、『中庸首章図解』は大坂においては出版されず、二洲が江戸に下った後、享和元年（一八〇一）に、門人池野孝暢の手によって上梓され、はじめて日の目を見たのであった。その理由についても、後ほど考察したい。

三、古林立菴との交友

次に、大坂の著名な医師であった古林立菴との交友を示す記事を取りあげる。

②〔五五〕古林立菴は見宜の族なり。常に素難を講じ、津津已まず。人以て迂緩と為す。余と志尹と皆交はり善し。志尹の塾生久しく病み、百方効無し。一日立菴に過り、談病生に及ぶ。立菴曰く。「先生を訪ふ毎に、吾その言貌を見る。蓋し風邪未だ除かざるのみ。憂ふるに足らざるなり」と。その説五行を引抛し、冗長厭ふべし。翌日来診して曰く。「果して吾の測る所の如し」と。乃ち薬を与ふ。五七日にして愈ゆ。志尹余に謂つて曰く。「彼の素難の学も亦た廢すべからざるなり」と。

古林立菴……一七三六—九九九年。名は正惇、字は君実、号は荊南。初め、高松氏、古林正桂を嗣ぎ二代立菴を称す。墓碑銘は『大阪訪碑録』所掲。

見宜……古林見宜（一五七九—一六五七）。その子孫は代々大坂の医家となり見宜堂と称した。『在津紀事』〔五四〕の記事にも「古林氏は浪華の名医なり」とある。安永版「浪華郷友録」に本家の見宜堂正虎、別家の立菴正惇、別系の槐庵を登載。

※素難……医書『難経』のこと。正式には『黄帝八十一難経』。「内経」の八十一の難解な部分を説いた書とさ

れ、とくに鍼灸学の分野では重んじられた。テキストとしては、中国・日本ともに、元代の滑寿が注した『難経本義』が最も広く用いられた。

※迂緩……回りくどく手ぬるい。遅滞。／※言貌……言葉と容貌。／五行……陰陽五行説。

【通釈】古林立菴は（古林）見宜の（血を引く）一族である。常に『素難』について講義し、いつまでも止めようとしなかった。人々は（それを）回りくどいやり方だと考えていた。わたしと尾藤志尹は、どちらも（立菴と）仲が良かった。志尹の塾生が長く病み、あらゆる方法を試みたが効果が無かった。ある日、立菴の屋敷に立ち寄り、話がこの病気の塾生に及んだ際、立菴はこう言った。「尾藤）先生を訪問するたびに、わたしはその（塾生の）話しぶりや容貌を見ておりました。おそらく風邪がまだ抜けただけでしょう。心配するには及びません」と。その際の説明は五行説を論拠に引用しつつ、ぐだぐだと嫌になるほど長いものであった。翌日（塾生のもとに）来診してこういった。「やはり私が推測した通りです」と。そこで薬を与えたところ、五日から七日ほどで治ったのであった。志尹がわたしに語っているには「彼の『素難』の学問も、まんざら捨てたものではないわい」と。

【考察】二洲と古林氏との交友については、資料的には、明和七年（一七七〇）の上坂の折にまで遡ることができ。藤村・合田二老人に与ふる書（『静寄軒集』卷之五）の中で、二洲は次のように述べている。

歳の庚寅（明和七年）、大阪に來り、病を医古林氏（大阪の名医、世々見宜堂と稱した）に養い、たまたま護園けんえん隨筆（徂徠の著。正徳四年刊。七卷）を読む。ここにおいて始めて物氏の説に疑あり。

つまり、二洲は、上坂後すぐに片山北海の元へ身を寄せたのではなく、しばらくの間は見宜堂古林氏の元に滞在して

いたのである。白木氏は、郷里川之江で暮らす二洲の父について「父は病気になる上阪して療養し、よくなると帰ったりしている」(前掲書・八五頁)と述べておられる。同じ事情を当てはめれば、明和七年における二洲の上坂も、直接の切っ掛け、もしくは名目の上では、「病氣療養ため」であった可能性もあろう。

いま注意しておきたいのは、この逸話において二洲は、「彼の素難の学も亦た廃すべからざるなり(彼の『素難』の学問も、まんざら捨てたものではないわい)」と、いやしくも「浪華の名医」の家系に連なる、十一歳年長の立菴(正惇)を、むしろ見下すような発言をしていることである。一方で立菴は、二洲を「先生」と呼んでいる。当時における、儒者と医師との身分関係(あるいは精神的立場)が推し量れるような逸話であろう。特に二洲の場合は、幼児から足疾を抱え、病気がちであったから、儒学の知識を補助としながら、医学方面にも相当の知識を有していたようである。そうした専門家意識(自信)が、立菴への軽視となって現れたという側面もあったかもしれない。白木氏は「二洲が(明和七年に上坂した際に)病を診て貰ったのは、古林正桂か正惇なのであろう」(前掲書・二九五頁)と推定されているが、この逸話から判断すれば、それは正惇(立菴)ではなく、父の正桂であったか。

なお、白木氏の著書には、二洲と立菴との、詩文の交友に関する紹介もなされているので、引用しておく(二九五～二九六頁)。

正惇は君実と号していたらしく、文雅の人で、其処で詩会も度々開かれていたと思われる詩があり、また「盆白桃、古林君実の需もとめに応ず」る詩、「古林君実の母氏八十を賀す」詩二首等が残っている。次の一首だけを記しておく。安永九年(一七八〇)、三十四才。

三月朔、過りて見宜堂に飲む

城頭園古転嬋娟　城頭　園古りて　うたた　転　せんげん　嬋娟

花樹幾株 石泉
花樹幾株 石泉を囲む
万顆 泛珠魚潜処
万顆 珠を泛べて 魚潜む処
千枝 擎雪鳥栖辺
千枝 雪を擎げて 鳥栖む辺
疎簾細細 詩中雨
疎簾 細細 詩中の雨
曲径重重 杯裏烟
曲径 重重 杯裏の烟
寧道幽情難暢叙
寧ぞ道わん 幽情 暢叙し難しと
永和佳節早相先
永和の佳節 早くも相先だつ

四、赤松眉公との交友

②（一二九）眉公（姓は赤松、名は彪、水野尾正珉を以て行はる）医を善くす。書詩皆巧みなり。篆刻は芙蓉・子琴と美を駢ぶ。而して人これを知る莫きなり。貧甚だし。後南都に徙つて死す。赤松子方毎にその懶漫にして生を為す能はざるを誚る。一日志尹の宅に会す。子方曰く。「吾子虚舟を見ざるか。その刻を以て、母をして坐食せしむ。吾子の刻、即ち虚舟に及ばずして、盍ぞ少しく自ら奮はざるか」と。眉公素より簡默なり。この語を聞くに至り、則ち徐に曰く。「僕の刻を以て、虚舟が輩に比するか」と。子方顧みて志尹に問ふ、「如何」と。志尹曰く、「唯だ千秋も亦た以て虚舟に勝れりと為す」と。子方愕然たり。已にして曰く。「苟にも然らば、吾益譲請せざるを得ざるなり。伎以てその身を潤すに足る。而るに狼狽ここに至る」と。眉公嘿然として復た言はず。子方眉公を愛すること親眷の如く然り。

眉公……文化五年（一八〇八）以前没、享年未詳。眉公は字。名は隴とも。号は漁石。安永四年版「浪華郷友録」・同六年版「難波丸綱目」とも水野尾正珉の名で作印家の項にあげる。春水遺稿・九（また春水文稿・三）に「漁石印譜序」（文化六年）を収め、静寄軒集・五に「題「眉公印譜後」」がある。それぞれ眉公の人と為りを伝える。小竹標記「堀江大火、眉公僑寓在_レ近、越高洲走拯、其家臨_レ水、眉公引満、指_三其所_レ焼曰、雲烟吞吐如_三竜上_レ天、不_レ好_三下物_一乎、不_三復移_三家什_一、高洲子方之子也」。越高洲は四八条（天満の大火）の赤松春菴の子。大火のさいの赤松春菴と赤松眉公の態度を対照させる。

芙蓉……高芙蓉のこと。一七二一―一八四年。名は孟彪、字は孺皮、号は芙蓉。高は出身地甲斐高梨を修したもの。近藤齋宮・大島逸記とも称す。清雅な印風を生み出し、印聖と称された。

子琴……葛子琴（一七三九―一八四）。橋本氏、本姓葛城、修して葛。名は張、字は子琴、通称は橋本貞元、号は蝨庵。大坂の人。医者。混沌社を代表する詩人で、篆刻も妙手。

赤松子方……赤松春菴。天明六年（一七八六）没、享年未詳。子方は字。号は春菴。本姓をもって越智訶巢とも称す。播磨の人。宝暦末に片山北海に入門、平沢旭山・佐々木魯菴と医学に励んだ（平沢旭山「漫遊草」）。のち医を業とし、道学者をもって自ら任じた。尾藤二洲ともつとも親善。越智高洲はその男。

※吾子……あなた。相手を親しんで呼ぶ称。

虚舟……前川虚舟。生没年未詳。名は利渉、字は虚舟、号は石鼓館。大坂の人。篆刻家。〔『在津紀事』の〕刊本にないが稿本はこの条の前に「虚舟前川清三郎 亦以彫刻名、摹帖篆印皆巧、著『稽古印史』、…』とある。

※坐食……働かずに食らう。／※簡黙……ことば数が少ないこと。寡黙。／千秋……頼春水のこと。
讓語……しかり責める。／※狼狽……ここでは、つまづくこと。生活が立ちゆかないことをいう。
※嘿然……だまつているさま。しずかなさま。

【通釈】眉公（姓は赤松、名は彪、水野尾正珉の名で知られていた）は医術に長けていた。書道も詩作も、みな上手であった。篆刻は（妙手として知られる）高芙蓉や葛子琴（の作品）と肩を並べる美しさであった。しかし、そのことを知る者はおらず、甚だ貧乏であった。後に南都（奈良）に転居して亡くなった。赤松子方はいつも（眉公が）なまけ怠つてちゃんとした生活が営めないことを叱っていた。ある日、尾藤志尹の家に集った際、子方は（眉公に）こう言った。「そなた、（前川）虚舟を見てごらん。自分の篆刻でもって、母を働かせることもなく養っているではないか。そなたの篆刻（の腕前）は、虚舟より劣っているのに、どうしてもうちよつと奮起し（て腕を上げようとし）ないのか」と。眉公は、ふだんは寡黙であったが、この言葉を聞くに至って、ゆつくりとこう言った。「わたしの篆刻を、虚舟のような者と比べるのか」と。子方は振り返って志尹に「どう思うか」と尋ねた。志尹は「わたしただでなく（頼）千秋も、（眉公のほうが）虚舟よりも優れていると思つています」と言った。子方は驚いた様子であったが、聞いた後でこう言った。「もしそうならば、ますます叱責せずにはおれぬわい。身を立てるに十分な良い腕前を持つているのに、これほどまで落ちぶれるとは」と。眉公は黙つたまま、もう何も言おうとはしなかった。子方が眉公を愛することは、まるで身内の者のようであった。

【考察】赤松眉公について、『在津紀事』ではこの逸話を載せるのみであるが、多彩な才能を持ち、殊に篆刻に関

しては、当時有名であった高芙蓉や葛子琴と肩を並べる妙手であつたらしい。その葛子琴の篆刻の腕前については、『在津紀事』(二四)に「子琴は笙しやう及び臂篋ひらひらを善くし、篆刻は妙手と為す」とある。高芙蓉についても『在津紀事』(二二五)(二二六)に篆刻に纏わる記事を載せるが、ここでは、それを踏まえつつ紹介されている中村真一郎氏の文章を引用しておく。

芙蓉、名は孟彪、字は孺皮、甲州高梨の人。……少にして医を学んだが、自ら欲するところでなかつたので、去つて京に遊び、広く時流と交り、特に篆刻の技は海内無双であり、柴野栗山も、皆川淇園も、彼を印聖と呼んだ。

兼葭堂(木村巽齋の私設博物館)には『蘇氏印略』二巻が蔵せられていたが、これはもと芙蓉の所有であつた。頼春水の『在津紀事』によると、「芙蓉の篆法世習を一洗するは、一いっに蘇氏を以て範と為すなり」とある。芙蓉はまた茶道においても造詣が深く、煎茶の器具「キビシヤウ」を最初に案出したのも彼だといふ……。天明四年(一七八四)六十三歳をもつて江戸に急逝すると、長い好誼のあつた大典禪師が彼のために墓碣銘を作つた。今、それが『北禅文章』卷之三に録せられている。

以下に、その一部を抄出しよう。「……篆刻ノ古今ニ妙絶ナルニ至ツテハ。固もとヨリ論ヲ待タズ。海内、皆、競ヒ乞ヒテ珍トス焉。……」(後略)

要するに、赤松眉公は、こうした「時代の名手」と肩を並べるほどの篆刻の腕前を持つていたのであるが、それを生かして母を養うという、世俗的な才覚には欠けていたのである。そのような、いわば生活無能力者であつた眉公を見捨てることなく、親身になって諫言する赤松子方の厚情が、この逸話の主題であつて、「子方 眉公を愛すること 親眷の如く然り」という最後の一文は、それを明示するものであろう。

なお、『静寄軒集』卷之十四所収の「眉公が印譜の後に題す（題眉公印譜後）」は、二洲と赤松眉公と関わりを知るうえで貴重な資料であるから、訓読によって紹介しておく。

眉公の篆刻に長ずるや、蓋し一時に無比なりと云う、豈に唯に篆のみならん哉、亦た詩を善くし亦た書を善くす、皆に其の自ら許す所なり。其の寧楽（奈良）に没するや、故友の（赤松）子方の子の士亮（越智高洲）、往きて妻児を訪ね、其の遺せる印紙を裏めて巻と為し、將に以て諸を世に伝へんとす。頼千秋（春水）為に序を作り以て寄せらる。余も亦た往事に感ずること有り、数字を題して以て之に返すも、老懶にして文を成す能はず。眉公は狂士なり、余嘗て其の懶を警す。今や乃ち擲楡して我を地下に笑はん。

ところで、この訓読文にも登場し、先の③（一二九）の逸話においても眉公を叱咤激励していた、赤松（本姓は越智）子方という、この熱情あふれる人物は、尾藤二洲の親友の一人でもあったが、その人柄をよく表す、いま一つの逸話が、『在津紀事』（四八）に掲載されている。

某の年臘月念九、天満の郷火を失し、延焼すること数百戸。開歳の客来り拜年する者、語災に及ばざるは莫し。赤松子方（名は邦、春菴を以て行はる）来り、直ちに中庸の某の章の義を論じて曰く。「今北海に過つてこれを論ず。吾未だ服せざるなり」と。天を指し地に画き、談論風生じ、一語も災に及ばず。

某の年臘月念九……安永六年（二七七七）十二月十九日（二十九日ではない）の天満の大火（摂陽奇観・三十五）。

※天満の郷……大坂三郷の一つ「天満組」の地区を指す。他の二郷は、北組と南組。天満組は、今の北区天満宮を中心とする一帯。

拜年……年始の礼。／名は邦……師友志には名を「惟義」とする。

この逸話で話題となっている「天満の大火」は、安永六年の歳末、十二月十九日に発生したが、翌七年の年明け早々に、年始の挨拶を兼ねて頼春水のもとを訪れた赤松子方は、『中庸』をめぐる談義に夢中となるあまり、年末の大火については、一言も触れることがなかったという。誰もが話題とした大火にはまったく無頓着で、ひたすら『中庸』の談義に夢中になる子方の学問への熱狂ぶりは、自ずから、冒頭①の逸話で紹介した、二洲の姿を想起させるものであろう。先の逸話を再掲すれば、次のようなものであった。

①（一六七）吾が塾生一夜外より帰り報ず、うへま上町火を失すと。時に志尹上町に居る。余二三の塾生をちゆう拉し、走つてこれを救ふ。至れば則ちその火甚だ速し。志尹孤坐し、燈下に在つて書をひ攤く。乃ち先に塾生を遣り還し、与に中庸首章の章句を論じ、夜半茶を喫して帰る。

この逸話に画かれた、大火の夜にも孤坐して燈下に書をひらく、二洲の沈思黙考の風姿は、子方の「天を指し地に画き、談論風生じ」る熱血な風姿と比べて——情熱の現れ方は、内向・外向のベクトルを著しく異にするもの——『中庸』解説への非常なる熱情と集中という点においては、まったく軌を一にするものであろう。

一方で、この二つの逸話は、この時期の二洲と子方（そして春水の三名）が、いかに『中庸』読解というテーマに没頭していたかを物語るエピソードでもある。一般論として、ある学者が、一つの個別具体的なテーマに関して集中し、熱狂的ほど関心を高める期間というものは、そう長くはないのが通例であろう。ましてや、二洲・春水・子方という三名の学者が、同じ『中庸』読解というテーマをめぐる等しく熱中する、という期間は、せいぜい一、二年が限度ではあるまいか。そうした点をも勘案した場合、おそらく、二洲と子方、双方のエピソードで言及された火災は、何れも安永六年十二月に発生した「天満の大火」を指すもの、と推定するほうが——別々の火災の折りと考えるよりも——より蓋然性が高いであろう。ちなみに、昭和四十三（一九六八）年に大阪市消防局が発行した『大阪市

消防の歴史』によれば、安永年間の火災として挙げられているのは、六年十二月に発生した当該の火災一件のみであり、「堂島蜷橋北東詰、小茶屋の二階より出火」して「淀川岸まで焼抜け」たという。「堂島蜷橋」は、今の北区曾根崎新地一丁目一の四九、滋賀銀行梅田支店あたりに相当し、当時、二洲が暮らしていた「上町」からは離れている。しかし、これは、先の「一六七」の逸話に「至れば則ちその火甚だ遠し」とある点と、却って符合するであろう。したがって、先に白木氏が冒頭①の二洲の逸話を、安永八年春頃と推定されていた点は、修正の必要があるであろう。さらに、やや想像の翼を逞しくすれば、二洲が三十三歳で撰した『中庸首章図解』が、なぜ、その後長らく出版されず、ようやく二十二年後の、享和元年（一八〇一）になって出版されたのか、また、なぜそれが、大坂ではなく江戸においてであったのか、という疑問に関しても、ある程度その背後事情を推定できるかもしれない。というのも、先の「四八」の逸話において、年明け早々、春水のもとを訪れた子方は、来るなり『中庸』のある章段に関する議論を始めた、というのであるが、この時、子方がなぜ大げさなジェスチャーすらまじえながら、熱狂的に論じたのかといえ、おそらく、その直前に片山北海のもとで『中庸』をめぐる議論を戦わせ、その興奮いまだ冷めやらずという状態で、春水のもとを訪れたからに相違ない。「今 北海に過つてこれを論ず。吾 未だ服せざるなり」という子方の科白は、それを明示するものであろう。さらにこのセリフによれば、『中庸』をめぐる北海と子方の議論は、互いに噛み合わず、子方は北海の意見に反対であった。一方、二洲の『中庸首章図解』は、天明五年（一七八五）の跋文で述べているように、「二三の同志と」論議しつつ著したものであり、その「二三の同志」とは、頼春水と赤松子方であったと、ほぼ確定できる。とすれば、『中庸首章図解』の内容には、おそらく、片山北海の『中庸』理解とは相容れない要素が含まれていたであろうことが容易に想像されるのであって、そうした書物を、師匠筋にあたる北海に抗って、しかも、その膝元である大坂において上梓することは、さすがの二洲にも憚られたのではあるまいか。天明

五年に『中庸首章図解』を重修訂正した際の跋文には「刻してこれを伝うるに若かず」と明記されているにもかかわらず、実際の出版が、遙か後になった背景には、こうした事情があったためとも推定できるのである。

なお、子方について付言すれば、その子息・越智高洲は、二洲の死後に、その全集である『静寄軒集』に序文を寄せており、白木氏はこれを詳しく紹介して（前掲書・五八九〜五九五頁）、「師の偉大なる学徳を世に明らかにしようとした畢世の大作」であると評価しておられる。

五、隠岐菜軒との交友

⑦（一三三）子遠は大坂府の騎士為り。騎士は威権甚だ著し。余嘗て志尹と伏見の桃山に遊ぶ。子遠これを聞き、従はんことを請ふ。吾が二人飄然として船に上る。船京橋に抵る。子遠旅装して水沚に埃つ。舟師これを見て、畏敬尤も甚だし。子遠僕従を還して船に上り、篷底に晤語す。翌朝伏見に抵り、桃山に登り遊観日を竟ふ。子遠吾が二人に事ふること、奴隷の如く然り。帰後來謝して云ふ。「疇昔の遊び、小子曠歳の樂事なり」と。蓋し子遠その権勢の拘る所と為り、僅かに大坂を離れて、始めてその志を暢ぶるなり。

子遠……隠岐菜軒（一七四三—一八八）。名は秀明、字は子遠また誠甫、号は菜軒。混沌社に参加。詩集「菜軒集」の春水序（文化四年）に「後入我社一、崇我学一、因与余親焉、日夕掬策、与塾童周旋、蕭然一書生也」と。菜軒は米津正栄の季子で十五歳のとき隠岐朝栄の養嗣となる。静寄軒集・八

「隠岐誠甫墓誌銘」に「事義母尤謹」。

大阪府の騎士……京橋口城番与力（安永六年版「難波丸綱目」二）。因みに、「大坂」の坂の字を阪とする例が宝暦頃からみられ（摂陽奇観・一）、底本にも大坂と大阪が混用される。

伏見の桃山……豊臣秀吉が伏見山に築いた伏見城は元和九年（一六二三）廃城となり、その跡に桃の木が群生。十八世紀後半から桃山とよばれた。

京橋……寝屋川にかかり、いまの中央区と都島区にまたがる橋。南詰は大坂城北側の京橋口に通じ、水陸交通の要衝であった。

※篷底……船の中。また、船底。／※晤語……向かい合って語る。また、互いに打ち解けて語る。

桃山に登り遊観日を竟ふ……茱萸軒集・一「登桃山賞花」はこの時の作であろう。

※疇昔……きのう。また、過日。／曠歳……久しい年月。

【通釈】（隠岐）子遠は、大阪府の与力（騎士）であった。与力はたいへんな権威を持っていた。わたしが昔（尾藤 志尹と伏見の桃山に遊ぼうとした際、子遠がこれを聞いて、お供をしたいと願ひ出た。（当日）我ら二人はひらりと上船した。船が京橋に到ると、子遠が、旅装して中州で待っていた。船頭はこれを見ると、誰に対するよりも畏れ敬った。子遠は下男を帰して船上り、（三人は）船の中で打ち解けて語り合った。翌朝、伏見に到着すると、桃山に登り、終日見物してまわった。（その間）子遠が我々二人に仕えること、あたかも奴隷の如くであった。大坂に戻った後、礼を述べに来た際には「過日の遊びは、小生にとって長く忘れたい愉快な出来事でした」と言った。思うに子遠は（日頃）自らの権力威勢に拘束されているので、少しでも大坂を離れることによって、はじめて、のびのびとした気持になることができたのである。

【考察】 隠岐栞軒は、片山北海の主催した混沌詩社の一員であり、二洲ともその席上で知り合ったと思われるが、二洲が上街に塾を開くとその塾生となった。白木氏は、栞軒（子遠）に関して次のように述べておられる（前掲書・九二頁）。

子遠は大阪の与力^{よりき}で、天明八年（一七八八）九月九日、享年四十七で死んでいるが、二洲は其の墓誌で「君少きより学を好み、長じてますます篤し。職に勤むるの暇、嘗て吾が徒に就きて経史を講論す」と記している。「大阪名家著述目錄」では、子遠を「業を片山北海に受く」と記してあるから、嘗ては北海に学び、後に二洲に学んだのであろう。子遠は、二洲より五才年長の人である。此の人にして此の事あり。以て二洲の学徳を知るべきである。二洲に敬事し、二洲遊行の際は殷勤に保護に努めている。二人応酬の詩も多い。

そこで、実際に『静寄軒集』にあたって子遠関連の作品を列記してみれば、以下の通りである。

- ① 「和子遠韻、子遠時致仕二首」（卷一）
- ② 「依韻和子遠」（卷一）
- ③ 「大井世華宅看梅花、分韻十蒸、同篠安道・隠子遠・吉夢鶴・古林百朋・田師逸」（卷一）
- ④ 「爲隠岐子遠、壽令堂六十初度、子遠致仕已數年」（卷二）
- ⑤ 「同隠岐・志村・松本諸子、泛舟遊墨江分韻」（卷二）
- ⑥ 「讀隠子遠遺集」（卷三）
- ⑦ 「與隠岐子遠書」（卷五）
- ⑧ 「高田硯銘、爲隠岐子遠」（卷十五）
- ⑨ 「隠岐誠甫墓誌銘」（卷十七）

これを見ると、①の詩には「子遠 時に致仕す」とある。詩の配列等から推して、隱岐子遠は天明二年（一七八二）に、四十一歳を以て与力の職を辞したらしい。時に二洲は三十六歳。『静寄軒集』には、基本的に安永九年（一七八〇）、二洲三十四歳以降の詩しか収載されていない。したがって——実際にはそれ以前にも詩の贈答が行われたと想像されるもの——現存する作品では、次に紹介する①の詩が、両者の交友を示す最も早期のものとなっている。

和子遠韻、子遠時致仕二首 子遠の韻に和す、子遠時に致仕す 二首

其一 其の一

江湖與城郭 江湖と城郭と

氣象誠難同 氣象 誠に同じくし難し

堪笑控弦士 笑ふに堪へたり 控弦の士

翻從被髮翁 翻從す 被髮の翁に

致仕……官を辞すること。

控弦士……弓の弦をひく兵士。武士の身分であった子遠をいう。

翻從……身を翻して從う。子遠が飄然と致仕し、二洲に付き從つたことをいう。

被髮翁……被髮は、髪を結ばず、冠もつけないこと。ここでは、在野の身分である二洲をいう。

其二

其の二

被髮元無伴 被髮 元より伴無し

爲難與俗同 俗と同じくし難きが為なり

誰知釣臺下 誰か知る 釣台の下

今日有兩翁 今日 兩翁有らんとは

釣台……魚を釣るための台。在野の気ままな暮らしの象徴。

兩翁……子遠と二洲のこと。

もう一首、二洲が江戸に下り昌平黌教官となつた後の、寛政六年（一七九四）秋に、六年ほど前に亡くなつた子遠の遺稿を読んで詠じた詩をとりあげておく。

讀隱子遠遺集 隱子遠の遺集を読む

故人背塵世 故人 塵世に背き

幽魂今何之 幽魂 今何くにか之く

往事猶在目 往事 猶ほ目に在り

感歎讀遺詩 感歎して 遺詩を読む

卷中多舊交 卷中 旧交多く

死生一別離 死生 一に別離す

羈官千里外 官に羈がる 千里の外

何堪搖落時 何ぞ堪へん 搖落の時

釋卷重西望 卷を釈おきて重ねて西望すれば

秋風滿天涯 秋風 天涯に滿つ

六、古賀精里との交友

⑨（一六八）古賀淳風は佐賀藩の人なり。京師に遊び、初め福小車に從ひ、後に西依成斎の門に入る。最後に大坂に寓す。志尹の妹婿福田某、為に屋を僦かつて僑居せしめ、志尹と近からしむ。亦た志尹の為に謀るなり。余も亦た屢しばしば往き、疑義を討論し、燈を剪つて或いは天明に到る。

古賀淳風……一七五〇—一八一七年。淳風は字。名は撲、通称は弥助、号は精里。佐賀藩士の子。安永八年佐賀藩に歸り、藩校の創立に与り教授。寛政三年（一七九一）江戸へ出、同八年幕府の儒員。

京師に遊び……安永四年（事実文編・三「精里先生行実」）。

福小車……福井敬斎。寛政十二年（一八〇〇）没、享年未詳。福は修姓、小車は字。名は軌。京都の人。丹波篠山藩儒、のち幕府の医官。

西依成斎……一七〇二—一七九七年。名は周行、字は儀平、号は成斎。肥後玉名郡の人。上京して若林強斎に学び、その家塾望楠書院の講主。

最後に大坂に寓す……「以三戊戌（安永七年）季夏一来^二寓于浪華、与^三余舍^一邇、往来再熟」（静寄軒集・三「寿^二古賀淳風祖母岩田氏八十二序^一」）。

福田某……福田富朗（『大阪訪碑録』温洲尾藤翁墓）。

為に屋を僦つて僑居せしめ……「古賀弥助事、農人橋二丁目に僑居勉学二候、すさまじき学効と被レ存候、

專ラ尾藤を長とし事フル也」（頼春水在坂期書簡・71、安永七年閏七月五日付）。二洲（志尹）の住所は

安永六年二月に順慶町一丁目、十二月に「又々宿替二候」とあり正確には不明（同書簡・33、43）。

余も亦た屢往き、疑義を討論し……「古賀、尾藤と研究ニて候、此頃ハ此方ヲたのミ文会ヲ仕候筈二候」

（頼春水在坂期書簡・72、安永七年閏七月十二日付）。また静寄軒集・三「作文会引」。

【通釈】古賀淳風は佐賀藩の人である。京都に遊学して、初めは福井小車に従つて学び、その後西依成斎に入門し、最後には大坂に寓居した。（尾藤）志尹の妹婿である福田某が、彼のために家屋を借りて仮住まいさせ、志尹と親しくさせたのだが、それはまた、志尹のために考えたことでもあつた。わたしもまた、しばしばそこへ出向き、疑問点を（三人で）討論し、（明かりが消えぬよう）燈火の芯を剪つて、夜明けに到ることもあつた。

⑩（一六九）淳風脚疾を患ふ。弟子金丸東作も亦た肥前の人なり。これが為に看護す。憂苦して寢食を安んぜず。淳風これを覺り、或いは佯り怒つて以てその意を安んず。東作猶ほ措く能はず。時に余と志尹とに就いて、医治の方を謀り、淳風をしてこれを知らしめざるなり。曰く。「吾云云する所以は、師の為国の為学の為なり。即ち代死するも亦た辞せざる所なり」と。その惴惴斯くの如し。亦た淳風の人と為りを見るべし。

脚疾……「脚疾 カツケ」（雑字類編・二）。

金丸東作……名は秩。安永八年九月精里とともに西下した。在坂中の詩に「奉レ送ニ春水先生帰省一序」（与

楽園叢書・九十二)がある。

肥前……今の佐賀県(一部長崎県)。／悃愾……まごころ。

【通釈】(古賀) 淳風が脚の病気を患ったことがあった。弟子の金丸東作もまた肥前(佐賀)の人であったが、師(淳風)のために看護して、うれい苦しみ、寝食をまともにとらなかつた。淳風はそれに気付いたので、時にはわざと怒ったふりをして(元氣な様子を見せ)安心させようとした。しかし東作はなおも放っておくことができなかつた。そこで、私と(尾藤)志尹の所に来て、治療のための医学的な処方について相談したが、そのことを淳風には知らせなかつた。彼がいうには、「私が(治療について)あれこれ(努力)するのは、師のため、国(肥前)のため、学問のため、なのです。ですから、師の身代わりとなって死ぬことすら厭いません」と。彼の真心はこれほどであった。また(師である)淳風の人柄も、よくわかるであろう。

【考察】古賀精里は、佐賀の藩校・弘道館の創設に寄与した後、幕府から召喚されて昌平黌教授となり、二洲や柴野栗山とともに「寛政の三博士」と呼ばれるに至った重要人物である。そこで、本稿が主な対象とする安永年間に重点を置きながら、精里の生涯を概観しておきたい。⁸⁾

古賀精里(名は僕、字は淳風)は、寛政三年(一七五〇)、佐賀藩の下級武士の子として肥前の国佐賀郡・(西)古賀村に生まれた。父忠能は、長年(佐賀藩独自の身分である)「手明鎧」という下級事務職を務めていた。明和七年(一七七〇)、鍋島治茂が第八代佐賀藩主となると、藩政改革の一環として、藩中の学識ある者に京や大坂への遊学(国内留学)を命じたが、安永三年(一七七四)、二十五歳の精里はこれに選抜されて、翌安永四年(一七七五)冬

には大坂に到着、半年後、京都に向かった。京には約二年間滞在し、福井敬斎（小車。幕府の御典医として著名な福井楓亭〔大車〕の次男。宋学にも通じた）に師事^⑨。その後、西依成斎（一七〇二〜一七九七）に師事して崎門学（山崎闇斎の学問）を学んだが、崎門派は読書を軽んじ、いたずらに空理を論じていると考えて、批判的に見ていたらしい（梅澤氏著書・一八頁）。安永七年（一七七八）には京都から大坂に移ったが、ここで尾藤二洲や頼春水と出会ったのである。精里は翌安永八年（一七七九）には佐賀に帰郷しているから、在坂期間はわずかにあしかけ二年に過ぎない。しかしこの間に、二洲や春水らと親しく交際したことが、精里に「朱子学こそが正学である」と確信させるに至った決定的な転機であったことは、諸家の指摘する通りであろう。ここでとりあげた『在津紀事』の二つの記事（⑨⑩）も、安永七年から同八年にかけて、精里が大坂に滞在していた頃の出来事であった。その後、帰郷の翌年（安永九年〔一七八〇〕）には、佐賀藩の手明鐘頭格となり、諸役相談格に抜擢されて、藩政の機密に参画。天明元年（一七八二）には、同年に創設された藩校・弘道館の教授にも就任した（三十二歳）。精里は、「学中規則」を定め「崎門朱子学の基本たる白鹿洞書院掲示を金科玉条のものとした」という。天明二年（一七八二）には文武頭取、同四年（一七八四）正月には「作文会」を設立した^⑪。寛政二年（一七九〇）になると幕府は林家に対して「異学の禁」を通過するが、精里はその翌年、寛政三年（一七九一）に藩主・治茂の参勤に従って江戸に赴き、翌四年（一七九二）には、幕府の命により昌平黌（昌平坂学問所）にて講義を行っている。陪臣では初めての講経であった。寛政六年（一七九四）父の後を継いで手明鐘頭となったが、翌七年（一七九五）七月には幕府の御用番から佐賀藩の江戸留守居に対して、精里を江戸に召喚するよう通達があり、精里は寛政八年（一七九六）三月二十二日、佐賀藩を出発し、四月二十五日には江戸に到着、五月二十八日、昌平黌教授となった。以後、大学頭・林述斎のもとで学政をとり、文化七年（一八一〇）十二月には、朝鮮通信使への外交儀礼を行うため、正使・林述斎とともに副使として対馬

に向かう。翌八年（一一八一）には韓使に応接して、副使の大任を果たした。文化十四年（一一八七）、六十八歳にて没し、江戸大塚の先儒墓地に儒葬された。子に穀堂（佐賀藩参政録）、侗庵（昌平黌教授）、孫に茶溪（筑後守・洋学所頭取）がいる。

ところで、先の記事⑨（一一六八）の注にも指摘があるように、精里が大坂にて二洲や春水と知り合ったのは、安永七年（一一七八）の季夏（六月）のことであった。それは二洲が安永元年（一一七二）に塾を開いてから七年後にあたり、二洲は三十二歳、精里は二十九歳であった。⑨の記事は、出会って間もない頃の出来事であるが「志尹の妹婿福田某、為に屋を僦つて僑居せしめ、志尹と近からしむ」というように、精里と二洲との出逢いは、偶然の産物ではなく、身内の者の手配によって、速やかに実現を見たのであった。ここに「妹婿福田某」とあるのは、安永四年（一一七五）に姉が嫁した、大坂の福田主計富郎のことであろう。⁽¹²⁾『静寄軒集』卷之二には「和福田富朗浦口雨韻」詩が遺されている。次の⑩（一一六九）の記事が示すように、精里は藩主・治茂の命によって京坂に遊学中の身であり、肥前の国の将来を担う俊秀と目されていた人物であるから、二洲の身内が、積極的に両者を引き合わせるべく努力したことは、納得の行く振る舞いであろう。この両者は、ほとんど出会った直後から、すぐさま高度な哲学的議論を交わしたようである。その様子は、『静寄軒集』卷之五に収載された、二洲の精里宛書簡によって窺い知ることができ。『古賀淳風に与ふ』と題されたこの三通の書簡は、何れも「陸王学」（宋代の陸象山と、明代の王陽明の学問）への批判を骨子とするものであり、精里が朱子学へと転向した、その決定的要因が、二洲や春水との出会いにあったことを物語る、重要な資料である。紙幅の都合で詳細は割愛せざるを得ないが、第一書簡の冒頭は、次のように始められている。⁽¹³⁾

昨日儼然之臨、雖相見之初、其言懇到、未嘗有所挾焉、令人亦自非君故旧、古人蓋恨相得之晚、信然。所論闊洛

及陸王之学、固非今人所能言也、則識之高、足下誠超然哉。

（昨日は威儀を整えて会見に臨まれ、最初の出会いはなのに、あなたの御言葉は懇ろで行き届いており、少しも差し挟むものがなく、あなたが古くからの知り合いでないことを忘れてしまいそうでした。昔の人が、出会うのが遅かったと恨むことがあるというのも、もつともだと思いました。あなたは、朱子・程子の学と陸象山・王陽明の学について論じられましたが、それは近頃の人がとても論ずることができないもので、あなたの識見の高さは、並の水準を遙かに超えています。）

先の『在津紀事』⑨の記事の最後で、春水が「余も亦た屢しばしば往き、疑義を討論し、燈を剪つて或いは天明に到る」と述べているように、精里はこの時期に、二洲や春水と徹底した議論を交わすことで、次第に朱子学が正当であることへの確信を深めていったのである。精里が二洲らと出会った、この安永七年から八年という時期は、二洲がまさに『正学指掌』（安政八年九月、初稿成る）を執筆し完成させた時期に当たっており、それに裏打ちされた二洲の熱情と確信が、精里に深い感銘を与えたことは間違いあるまい。二洲と精里、そして春水は、実に、これ以上は望めないという絶妙のタイミングにおいて出会ったと言うべきであろう。

注

- (1) 『在津紀事』の尾藤二洲―在坂前期における春水・北海・履軒との交友』「人文学論叢」13号（愛媛大学人文学会・二〇一二年）参照。
- (2) 『在津紀事』の底本は、多治比郁夫・中野三敏校注『当代江戸百物語 在津紀事 仮名世説』（新日本古典文学大系97・二〇〇〇年、岩波書店）を用いた。
- (3) 語注は、底本に掲載する多治比郁夫の注釈を引用したが、※印を付したものは、諸田による補注である。
- (4) 白木豊著『尾藤二洲伝』（昭和五四年・尾藤二洲伝頒布会）二五六頁。
- (5) 『静寄軒集』の原文は、『詩集 日本漢詩 第七卷』（一九八七年・汲古書院）に拠った。訓読のみを掲げる場合も底本と校合したが、その際、当該の文章が前掲した白木氏の著作に収録されている場合には、白木氏の補記も含めて参照した。
- (6) この注については、底本の本文および語注によって諸田が補筆した。
- (7) 『木村兼霞堂のサロン』（二〇〇〇年・新潮社）三二六頁。（）内は、諸田による補足。なお、『在津紀事』の訓読は底本により修訂した。
- (8) 古賀精里の生平については、主に梅澤秀夫著『早すぎた幕府御儒者の外交論 古賀精里・侗庵』（肥前佐賀文庫003・出門堂・二〇〇八年）を参照した。
- (9) 一説では、御典医で珍籍書画の大コレクターとして著名な福井榕亭（一七五三―一八四四、福井楓亭の長男）に師事し朱子学を学んだともいう（前掲『詩集 日本漢詩 第七卷』『精里集抄』解題）。
- (10) 『詩集 日本漢詩 第七卷』『精里集抄』解題。
- (11) おそらく、在坂期に二洲や春水らと定期的に開催していた「作文会」を、佐賀藩において応用したものであろう。在坂期の「作文会」については、白木氏の著書九五―九六頁参照。
- (12) 白木前掲書年表参照。また、『静寄軒集』卷之十「閻叔年譜」にも「二姉有り、浪華の福田氏に嫁ぐ」と。
- (13) 訳文は梅澤氏の著書に拠った。